

小さな旅

去る八月二十一日、三日間の小さな旅に出た。一行は読書会の仲間十二名、用意されたマイクロバスで、豊後から日向へかけての巖の深い九州山地を、北から南へと溪谷を縫う旅であった。美しい杉の造林に蔽われた山々は、滴るばかりの緑を湛えていた。

瀧廉太郎縁りの竹田岡城址から始まり、阿蘇の噴火が造ったという高千穂峽、稗搗節の里椎葉村を経て、若山牧水の生地と、武者小路実篤の日向新しき村の跡を訪ねた。牧水と実篤は共に明治十八年生まれで、今年は恰も二人の生誕百年に当り、それを記念する行事がそれぞれ催された。牧水の生家は、宮崎県東臼杵郡東郷村坪谷つぼやの、坪谷川の清流に臨む国道沿いにあった。それに隣り合わせた牧水記念館の裏の急な道を暫く登ると、牧水の歌碑がある。それは、後ろに倒れかかるように坐っている感じの、巨大な岩石で、その傾斜面に、見なれた牧水の筆蹟で、次の歌が刻まれていた。

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋もかすみのたなびきてをり

この歌は、父の死を看取った彼が、郷里に住みつくか、再び上京するか悩みつづけた頃の作で、この岩に倚り掛って、西南方に聳える尾鈴山を望みながら詠んだものという。その尾鈴山は、折から厚い雲に蔽われて姿を見せなかった。

同県児湯郡木城町石河内の新しき村跡には、実篤の前夫人房子さんが、九十四歳の高齡を保って、ひっそり住んでいた。

(昭和六〇・一〇)